



はしがき（共同研究ノート：文学者の演劇活動）

梶尾，文武

(Citation)

國文論叢別冊, 3:48-48

(Issue Date)

2026-08-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505559>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505559>



はしがき

梶尾 文武

大正期において、上演を主目的としない「読む戯曲」すなわちレーゼドラマが流行して以来、演劇活動を専らとしない文学者が戯曲創作を試みる営みは、日本の近代文学史の中で脈々と受け継がれてきた。この潮流は昭和期、とりわけ戦後の復興期において一つの頂点を迎える。文学座、俳優座、劇団民藝といった文芸色の強い新劇劇団が次々と隆盛を誇る中で、舞台という表現空間は多くの小説家や詩人、批評家たちを魅了し、彼らもまた積極的に戯曲の創作を手がけた。

しかし、近年の文学研究および演劇研究における動向を省みると、そこには明らかな偏りが見られる。メディアミックスや物語の変容プロセスに焦点を当てた、原作小説の演劇へのアダプテーション（脚色・翻案）に関する議論が盛んに行われている一方で、小説家や詩人といった「非専門劇作家」が自ら筆を執ったオリジナルの戯曲作品そのものへのアプローチは、いまだ限定的であると言わざるを得ない。正宗白鳥や谷崎潤一郎、あるいは戦後の三島由紀夫や安部公房のように、劇壇でも確固たる地位を築いたわずかな例外を除けば、多くの文学者が遺した戯曲作品は文学全集の隅に埋もれたまま、存外に多くが手付かずの状態、あるいは文学研究・演劇研究の双方から見過ごされた空白地帯として放置さ

れているのが現状であろう。

こうした問題意識に基づき、本企画では、梶尾研究室に所属する学生が各自の専門（またはそれに近い）とする作家を個別に検証・対象化する。主たるアプローチとして、それぞれの文学者が遺した戯曲作品の精読はもとより、その背景にある演劇活動の実態、新聞や雑誌に発表された演劇論・戯曲論、さらには詩と劇の境界を探索する劇詩論にいたるまで、多角的な紹介と批評を試みる。同時に、これまで散逸しがちであった初出情報や上演記録、関連文献などの基礎的な書誌資料を網羅的に整備し、後続の研究の基盤となる「研究ノート」を作成・集積していく。

成果の公表にあたっては、本誌電子版のプラットフォームを活用し、継続的な連載形式で掲載を行っていく。デジタル媒体ならではの柔軟な情報発信、検索性や網羅性を活かし、最終的には、これらの研究ノートを有機的に結合・体系化することで、近代日本における「非専門劇作家の演劇に関する小事典」の構築を目指したい。

（かじお ふみたけ）